

『世界遺産とは』

富岡市立西小学校 6年 井上 乙葉

私は、小学生になる前に家族で2回広島へ行きました。2回とも、原爆ドームに行きました。まだ、小さくてあまりその時のことは覚えていませんが、父が「ここに、原子爆弾が落ちてたくさんの方が亡くなったんだ」と話してくれました。

原爆ドームは1996年に世界遺産に登録され、別名「負の遺産」とも呼ばれているそうです。原爆は原爆ドームから南東約160メートル、高度600メートルの位置で爆発しました。原爆ドームは激しい爆風と熱線を浴び、建物内にいた人は全員即死でした。しかし、原爆ドームは奇跡的に側面の一部の壁や鉄骨のドーム部分を残して、今も私たちに悲さんな戦争の一部を教えてくれています。

原爆が落とされてから75年がたち建物を壊された時の状態で保存していくことが重要になっています。当時の状況を知っている方々が高齢化によって亡くなったり、建物の維持や経済的な理由によって守っていくことも難しくなっていると思います。

原爆ドームを訪れた時、若い方が手にファイルを持って道行く人に話しかけていました。原爆被害の悲さんさを伝えているボランティアの人でした。家族でしばらく聞いていましたが、私は内容が分からなくて「はやく行こう」と言ってしまうました。兄たちは小学生だったので、静かに話を聞いていました。このボランティアの方は、この場所で起きた悲さんな戦争のことや原爆ドームという世界遺産を守っていきたいという思いで、話していたのかなと、今は思います。

私の住んでいる富岡市にも世界遺産があります。明治5年の開業、日本初の本格的な器械製糸の工場です。敷地を含む全体が国の史跡になっていて、初期の建造物群が国宝および重要文化財に指定されています。富岡製糸場が世界遺産に登録されたのが、2014年です。その後、地元の小学生は必ず1度は学校で富岡製糸場に見学に行きます。私は、富岡製糸場を見て、すごいと感じたのはレンガ作りで作られているところです。明治初期に、西洋の建築方法で作られている富岡製糸場を、150年の間、片倉工業を始め民間の会社が運営していたそうです。長い運営努力によって、私達の市に世界遺産が生まれました。世界遺産を守ることは、当時の時代を守るのと同じだと思います。そのためには、守ってきてくれた方への感謝はもちろん大切ですが、たくさんの方々が富

岡市を訪れてくれることも大切です。経済的に豊かにならなければ、修理などができなくなるからです。それは世界遺産を持っているどこの市や県も一緒だと思います。世界遺産がなぜ遺産になっているのか、何のために世界遺産を守っていかなくてはいけないのかを考え行動することが大切だと思います。

『私の「わたしの平和宣言」』

富岡市立西小学校 6年 土屋 彩季

私が今この作文を書いているのは8月15日です。テレビでは、第二次世界大戦が終わった日から75年と伝えられています。戦争というのは遠い昔のことだと思っていたけれども、私のおじいちゃんやおばあちゃんが生まれていた時のことだったと分かりました。そして、おじいちゃん達に話を聞いてみると、前橋にも爆弾が落とされたと教えてくれました。前橋は私の住んでいる富岡から1時間ちょっとで行ける所です。調べてみると、終戦10日前の8月5日夜にアメリカの飛行機が29機も来ました。これによって535人が犠牲になり前橋の町が8割以上が焼けてしまったのです。戦争と聞くと広島や長崎だけで起こったことだと思って少し他人事のように思っていたけれども、この話によってグッと身近なものになりました。そして、あらためて平和の重要性を感じ、ユネスコの活動が大切なものだと思います。

私がユネスコの活動を調べた中で印象に残ったのは、「わたしの平和宣言」です。2000年の「平和の文化国際年」を記念して、ユネスコはマニフェスト2000へ署名活動と呼びかけました。そして日本ユネスコ協会ではこれを日本語に訳して「わたしの平和宣言」としてたくさんの署名を集め、ユネスコへ提出しました。

「わたしの平和宣言」には、次のように書かれています。私は人類の未来、特に子供達の未来に対して責任があると思うからこそ、日々の生活の中で、家族と共にいる時、次のことを誓います。

- 一、「すべての命を大切にする。」
- 二、「どんな暴力も許さない。」
- 三、「思いやりの心を持ち助け合う。」
- 四、「相手の立場になって考える。」
- 五、「かけがえのない地球環境を守る。」
- 六、「みんなで力を合わせる。」

この6項は、戦争のない平和な世界を築くために必要なことです。戦争だけ

でなく、現在のコロナ禍の世の中においても、命を大切に他人を思いやり助け合い、みんなと力をあわせることがコロナに打ち勝つために必要なことではないかと思いました。

私はこの宣言を紙に書いて、自分の部屋にはっておくことにします。そしてほかの人にも伝えていきたいです。この6項目を一人ひとりが心がけることによって、人々の争いのない平和な世界を築いていきたいです。

『平和な世の中に』

富岡市立黒岩小学校 6年 佐藤 棕亮

ユネスコというと世界遺産が浮かびます。というか、僕は世界遺産しか知りませんでした。そこで、ユネスコについて調べてみました。ユネスコとは「国際連合教育科学文化機関」のことで「国連」「教育」「科学」「文化」「機関」のそれぞれの頭文字をとって「UNESCO」となっていることが分かりました。調べていく中で「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」ということと「築かなければならない」心の中の平和とはいったい何であるかを教育、科学、文化、マスコミュニケーションの分野で探し求めるのがユネスコの活動の目的とありました。その目的から各国政府が加盟し、予算を出し合って世界のためにすぐれた活動に一般市民の協力が必要ということが分かりました。僕の身近なところでは「ユネスコ世界寺子屋運動」として年始の書き損じはがきの回収や年に一度配布される富岡ユネスコ少年少女合唱団員募集があります。今まで意識していなかったところで身近に存在していたのだということが分かりました。僕がユネスコの活動について調べていく中で一番気になったのは「平和」という言葉でした。そこで平和について考えてみようと思いました。僕は今、平和な環境で毎日を過ごしています。家があって、おいしいご飯が食べられて、学校に行って、土日には野球ができます。このような環境は世の中の人々が当たり前を与えられていると思っていました。しかし、国によって今でも戦争や貧困で苦しみおなかいっぱい食べることができず、若くして亡くなってしまう人がたくさんいるということを知りました。もし、自分がそんな国に生まれていたらと思うとゾッとしてしまいましたが、その「ゾッと」とする中に生きている人がいると思うとかわいそうでなりません。世の中の人全員が平和になるために一人ひとりが人を傷つけないという気持ちを持ち続けたらいつか平和で明るい未来が来ると僕は思っています。今まで僕は自分が幸せだと考えたりしたことはなかったけれど、自分が幸せの中にいると意識して、これからは今まで当たり前だと思っていたことに感謝して、一生懸命勉強や運動をしていきたいと思いました。

『私と富岡製糸場』

富岡市立妙義小学校 6年 嶋田 優菜

私が世界遺産と聞いて一番最初に頭の中に思い浮かぶのは、私達が住む富岡市にある富岡製糸場です。私は、自分が住む富岡市に世界遺産がある事を誇りに思っています。このような世界遺産を登録したり、保護したりしている機関がある事を学びました。その機関はユネスコと言うらしく、世界遺産を守るだけでなく文化を守ったり、全ての人々が平等に教育を受けられるようにもしているらしいです。そこで、私も富岡製糸場を大切に残したいと思ったので、富岡製糸場について勉強することにしました。

私は、4年生の時に初めて富岡製糸場に行きました。4年生の時は世界遺産やユネスコについて良く分からなかったので、富岡製糸場の中を見学したくらいでした。本当なら今年も富岡製糸場に見学に行って、もっと詳しく見たかったのですが、いろいろな事情があって行くことが出来なくなってしまいました。そこで、妙義町も富岡製糸場と何か関係があるのではないかと思い調べてみました。すると、富岡製糸場を造るために妙義山の木が使われていることが分かりました。私は、妙義山の木が富岡製糸場に使われていることを知って、おどろきました。なぜかという、妙義山の木は神の木と言われているからです。神の木を切って製糸場造りに使うことを、妙義の人々は怒らなかったのか気になったので先生に質問しました。すると私が思った通り、妙義の人々は神の木を切るとバチがあたるなどの思いから、神の木を切って使うことに反対したそうです。ですが、いろいろな人がお願いをしたことで、立派な建物を造ることが出来るならと、妙義の人は神の木を使うことを許可したそうです。私は、大好きな妙義山の木を富岡製糸場を造るのに使っていることを知って、妙義山も富岡製糸場のことも改めて誇りに思い、ずっと大切に残していきたいという気持ちが深まりました。

富岡製糸場と妙義の関係について調べてみて、新しく知ったことがあり、とても勉強になりました。それは、妙義山の神の木が使われていることです。このことを知って、私は妙義山の木が世界遺産のように見えてきました。これからは富岡製糸場をずっと残していくことと、富岡製糸場についてもっと知ることによって、富岡製糸場を大切にしたいという気持ちが今以上に深くなると思いました。

『平和のために』

富岡市立西中学校 1年 田村 董

ユネスコ、と聞いて皆さんは何を思い浮かべますか？国際連合や世界遺産が思い浮かぶ人が多いと思います。私は「平和」という言葉が一番最初に思いつきました。

「平和」とは、戦争や暴力で社会が乱れていない状態を意味します。ですが、たとえ戦争が起きていなくても、男女差別や貧困、環境破壊などの問題を抱えていれば「平和」とは言えないでしょう。

ユネスコの目的は、教育、科学、文化の発展と推進です。この三つと「平和」は一見あまり関係がないようですが、ユネスコの活動内容が分かれば、その関係性が見えてきます。

活動内容の一つとして「世界寺子屋運動」というものがあります。世界にはさまざまな理由で学校行けない子どもが1億人以上、教育を受ける機会がなく文字の読み書きが出来ない大人が7億人以上います。世界寺子屋運動では、基本的人権として誰もが教育の機会を得て、貧困のサイクルを断ち切り自ら考えて行動を起こしていけるように、1989年から活動を続けています。寺子屋は年齢や宗教、性別にかかわらず、全ての人が公平に学べる場です。

日本では、誰もが当たり前のように学校に通え、文字や計算などの勉強が出来ます。ですが、世界ではそれは当たり前ではありません。通えない理由は貧困や差別などと「平和」とはかけ離れた理由が大半です。ユネスコの世界寺子屋運動があればそんな人達を救う事ができるでしょう。そしてそれは「平和」にも大きくつながります。

本当に世界が「平和」となるには何年かかるか分かりません。けれど、この恵まれた環境を生かして何かできることはあると思います。ユネスコ憲章前文の初めには

『戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない』

とあります。私は「心の中の平和」とは、相手を思いやる気持ちだと思います。相手のことを考えて行動すれば相手は不快な気持ちになりません。そうすれば、戦争なんて起こることはないだろうし、みんなが仲良くできると私は考えます。

そして私たちはこれから守らなければならない物があります。それは「文化」です。言葉や音楽、食べ物やスポーツ、そして建造物など世界中には多くの文化があります。どれも先人達が残してくれたとても大切なものです。そして全

でのものからいろいろな情報、過去の出来事が伝わってきます。ユネスコではその文化を守るために世界遺産として保護しています。

ユネスコは「平和」のためにさまざまな事を行っています。ですがそれには多くの人の協力が必要です。ボランティアや募金など、気が向いたらぜひしてみてください。

『まずはそう思うことから』

富岡市立西中学校 2年 金井 柚菜

「戦争をしたくない」まずはそう思うことが大切です。

再び戦争を起こさないために何ができるか考えたことがある人は沢山いると思います。私も以前考えたことがありましたが、これといった考えが自分の中で出せないまま終わってしまいました。ですが、この作文を書くにあたり戦争について調べたり、考えたりして出した答えは「意思を持つこと」です。国会議員になって、絶対に戦争が起こらない国づくりをする、デモを起こして自分たちの意思を周りに主張する。そんな大規模なことをしなくても大丈夫だと私は思っています。戦争をしたくない、人を殺したくない、殺されたくない、国民全員がそう思えば最悪な結果を招くことはなくなるはずです。

人々は争いを繰り返して現在まで進化してきました。それは歴史に残るようなことだけでなく、ささいな口喧嘩など様々なものがあると思います。友達、兄弟や姉妹としたちょっとした喧嘩からも、人との接し方や人関係について学び、そこから人として成長した経験が人間性を高める。そんなことも珍しくはないでしょう。このように、いろいろな種類の争いの中で最も悲惨である戦争、これについてルネサンス期の政治思想家であるニッコロ・マキャヴェッリは「戦争は始めたい時に始められるが、やめたい時にはやめられない」と言っていました。人を傷つけるのは簡単だけど、その後元の関係に戻るのは難しい。このように戦争だって再び始まってしまったら終息させることは難しいでしょう。当時、兵隊として生まれてきた人々は人を殺すことだけを教え込まれて育ちました。時には幼い子をアルコールや麻薬で洗脳し家族や友達を殺させて殺人への抵抗感をなくさせる大人もいたそうです。そこには子どもの「戦争をしたくない」という意思さえ生まれませんでした。人を殺すことに使命感を抱き、戦争をさせられて亡くなってしまった方々の死を無駄にしないよう、自分が誤った歴史を繰り返さないように生きて、彼らの死に意味を作っていこうと思います。

「戦争をしたくない」そう思うことがどれだけ大切でしょうか。これから先は実際に経験をしたことがない人々で社会が形成されていきます。人を殺し合う争いが起こっていた事実を決して忘れず、一人一人がそれに対する反対意識をきちんと持っていきましょう。戦争の対義語は平和です。「特別のことが無くて穏やかな状態」を表している平和。終戦から75年を迎える2020年、これからも平和な世の中が永遠に続くことを、私は心から願っています。まずは自分でこの考えを周りに伝え、ユネスコ活動の普及啓発に貢献していきたいです。

『平和を築くために』

富岡市立妙義中学校 2年 佐藤 優衣

この世界に読み書きができない人、学習ができない人が約9億人もいます。その理由は、戦争や貧困などです。そのため、教育を受けられず、生活に必要な知識を十分に身に付けることができません。これが現実なのです。同じ世界に暮らす人間として、このような不平等なことがあってはいけません。そして調べていくうちに「ユネスコ協会連盟」が中心となり支援していることが分かりました。

ユネスコ協会連盟では、世界中のたくさんの方が平等に教育を受けられるよう努めています。色々な活動の中で、私は寺子屋運動に注目しました。

寺子屋運動とは、発展途上国の子どもと読み書きのできない大人に学ぶ機会を作るための支援活動です。読み書きができない人は、目が見えないことと同じくらい辛いことで自分に自信が持てず、逆に文字が読めるようになった人は、自信を持って前向きに行動できるようになります。読み書きができることは自立への一歩であり、生まれた国が違っても同じ人間として生きていく中でとても大切なことだと私は思いました。

書き損じ葉書11枚で一人が1ヶ月勉強することができます。私も含め、たくさんの方が書き損じ葉書で誰かの未来の手助けをすることができるのです。その1枚は、世界中の全ての人々が平等に教育を受けられることに必ずつながっていくと、私は考えます。

このような活動を知ってから、私は当たり前の事について考える機会が多くなりました。私たちは毎日当たり前のことが当たり前のようになっています。しかし、これが逆の立場だったらどうでしょうか？学校へ行くことさえできずに、家族の手助けのために仕事をしなければなりません。また、食事や睡眠も

十分にとることができません。それでも家族のために頑張らなくてはならないのです。私には絶対に同じことはできません。改めて、当たり前に行えることは幸せなことで、今、ここに私がいることも奇跡だということ。そして、自分のためだけではなく、他の人のために使える時間がとても大切であるということに気付きました。

今日も世界の各地で戦争によって多くの人々が命を失っています。そして、人々は幸せに暮らすことができず、多くの子どもたちが教育を受ける権利を奪われています。世界中の全ての人々が当たり前に行われること。それが私たちの未来になくってはならない大切なことです。そのために私は、募金活動などに積極的に参加していきたいです。とても小さなことですが、そんなふうに思える人が一人でも増えてくれることを私は願います。それこそが平和を築くための第一歩であるから。